てない、総会後の大好きな懇親会にも出席せず、大急ぎで職場に戻り課長に「どうしょう、理事機関に選ばれてしまった、無理ですよね」と報告したところ、まったく予想に反した返答「いいんじゃない、やれば」ですって。

それ以来4期8年、経済学部から異動になるまで、他の力量ある理事の方々に助けられ、迷惑をかけながら何とかやってきました。私の異動後の理事選で日大経済は選出されないための選挙運動（？）を行い、その後は悲しいかな経資協を退会したというニュースを身を切られる思いで聞くことになったのです。

10数年の経資協とのお付き合いの中で、図書館員生活にとって非常に役に立ち、成長を助けてくれた特記すべき活動が2つあります。ひとつは『文献季報』のための論文採録作業です。一番多いときは30種類の雑誌を担当していました。非力のため苦労しましたが、論文の前書き・後書きを読み、参考文献を調べるなど、日常のレファレンスワークに大いに役立ちましたし、経済学の学問動向を知ることによって個人的にも関心を深めることにつながりました。もうひとつは、ビデオ『経済文献の達人』作成に関わり、知らない世界をいろいろ知りました。出演して下さった劇団の方とは今でも付き合い、その劇団の芝居はほとんど観ています。

経資協と出会わなかったら、きっとかなり貧しい図書館員生活を送ったことと思います。

経済資料協議会の活動に参加して

小　川　喜久雄
（元東京経済大学図書館）

私は、1996～2001年度まで、経済資料協議会（以下、経資協）の

理事として、この会の活動に参加できたことを誇りと思っています。

とりわけ、『五十年史』の編集委員会のメンバーとして微力ながら活動できたこと、また、50周年の式典において、司会・進行役を務め責任の一端を担うことができたことは多くの先輩、同僚の方々の支えがあってのことと改めて感謝しております。

さて、何といっても経資協活動の最大の功績は、『経済学文献季報』を発行し続け、経済学を中心とする社会科学を研究する数多くの学生・院生・研究者に大いに貢献することができたことです。

また、この索引誌を作成する作業は、資料を提供する機関の基本的任務である「資料を知り、利用者と資料を結びつける」その労働過程を豊かなものにするためにも多大な機会を提供し続けたのです。

論文採録にあたって頭を悩ましたのは、的確に8個のキーワードを付与する作業でした。

一例をあげてみましょう。本学の『東京経大学会誌』に加藤雅教授が「景気変動の原因について」と題してⅠ～Ⅹにわたって論文を掲載しました。ところが、この10論文の全てが章節の形式はとっているものの算用数字が羅列されているだけなのです。結果として、私は経済学辞典を片手に全ての論文を通読し、それが、コンドラチェフの波動説に基づく論考であることを理解するまで悪戦苦闘せざるを得ませんでした。

これも今では、懐かしい思い出ですが、よもや、盛会に執り行われた50周年式典後、7年で解散することになろうとは……。

私は、式典を閉じるにあたって、50年の歴史を振り返り、先達の方々が幾多の危機を乗り越えてこられたか、そして、彼らの努力と情熱が『五十年史』に籠められていることを紹介しながら、今後、『五十年史』を座右の銘として努力したい旨、挨拶しました。

その時、私の脳裏に浮かんだ『季報』の将来像は、米国国立医学図書館のMedlineであり、PubMedでした。米国では所轄の行政機関が国家的事業として索引誌の作成を推進しています。

我が国の場合は「小泉構造改革」の名のもとに、貧困な文教行政と社会保障の改悪が罷り通り、このままでは「学級崩壊」どころか社会崩壊さえ招きかねない状況にあります。

経資協を解散にまで至らしめた要因も、こうした国家政策と無縁とは思えないのです。

『経済学文献季報』編集の手作業と「デジタル化」

庄　谷　邦　幸
(大阪市公文書館館長)

(1) 手作業の楽しさ

私は半世紀前の1958年の丸一年間、『経済学文献季報』(以下『季報』と略す) の編集センター内で編集実務専任者として働いた。

この『季報』が刊行にいたるまでの歴史的経過については、『季報』第1号 (1956年6月刊) 冒頭の「刊行のことば」で詳述されている (杉本俊朗氏記)。これは重要文献であると思う。

私は1958年、大阪市大経済研究所資料室に臨時職員として雇われ、『季報』編集にたずさわることになった。

編集作業は加盟各機関に採録雑誌が割当てられ、採録された論文のカードが編集センターに送られてくる。総数は3カ月に4,000～4,500枚位である。当時は日本文献、中国文献、欧米文献、ソヴェト文献に分けられ、独自分類の下で著者のＡＢＣ順に配列し、点検作業が行われる。大阪市大経研では、日本文献については専任研究員十数名が専門分野別に点検し、中国文献は杉野氏、ソヴェト文献は山田氏が担当した。点検作業での困難点は、(a) 論文がシリーズで書かれている場合、『季報』の前号で掲載されていたのに、本号で採録されていない場合、またその逆の場合、継続性を保つため、「現物」にあたって照合点検する場合が生じる。また、(b) 編集委員会と出版社 (有斐閣) との折衝で、『季報』の総頁数の制約があり (当時200頁？)、自ずから採録カード数が4,200タイトルに制限される。ところが全加盟機関から送られ